

一 般 演 題 抄 錄

11. Gastrointestinal Stromal Tumors (GISTs) の外科切除例における、 病理組織学および電子顕微鏡的検討

米田 円 蛭間 眞悟* 寺村 一裕** 橋本 重夫

近畿大学医学部第2病理学教室 *関西女子短期大学保健科 **若草第1病院臨床病理科

Gastrointestinal stromal tumor (GIST) は純粋に平滑筋系や神経系への分化を示さない消化管間質系腫瘍である。この腫瘍の細胞起源や生物学的態度について考察するため、GIST 11症例につき、病理組織学的及び電子顕微鏡的に検討した。さらにヒト正常小腸において、消化管の自発運動に対し、ペースメーカー的な役割を示すと考えられている細胞である Interstitial cells of Cajal (ICC) を同様に観察し、GIST と比較した。組織学的に、GIST 症例の約8割は紡錘形細胞が主体であり、それらが束状、花むしろ状、柵状などのパターンをとり、残りの約2割は類円形細胞が主体であった。また診断時に既に転移の認められた症例は3例あり、それらを明らかな悪性とした場合に、腫瘍径、核分裂、壊死、細胞密度、細胞の多形性のなかで、悪性として、その必要十分条件を満たすものは認められず、従って、病理組織学的に良悪の区別のしえない、境界病変があると考えた。免疫組織化学的には、造血幹細胞以外に ICC にも発現する c-kit 遺伝子は91%、間葉系のマーカーの vimentin は82%、内皮細胞などに発現する CD34は45%で、それぞれ陽性を示していた。平滑筋

系のマーカーである α -smooth muscle actin, 神経系のマーカーの S-100 は殆ど陰性を示していたが、一部の腫瘍細胞に陽性を示す症例もあった。電顕的には腫瘍細胞は細胞質突起を有し、細胞質内には自由リボソーム、中間型フィラメントが豊富に見られた。また平滑筋細胞や神経系細胞に見られるような微細構造物も一部に認められた。さらにヒト正常の小腸組織では、c-kit 陽性を示す ICC は筋層間にみられ、その形状は、紡錘形を示し、また免疫組織化学的、電顕的に GIST の腫瘍細胞と共通性を示す点が多くみられた。従って、GIST の大部分は、ICC 由来であるが、一部に平滑筋細胞や神経系細胞への分化を示すものもあることが示唆された。これらのことから ICC の分化と GIST との関連性を考えた場合、ICC には神経系細胞や平滑筋細胞などへの分化能をもっている未分化なものと、より分化がすすんだ ICC があると考えられ、前者が分化を示す段階で腫瘍化したものを広義の GIST、後者が純粋に腫瘍化したものが、狭義の GIST として取り扱う必要があると考えた。

12. 外科・産婦人科領域における自己血輸血実施への可能性について

川本 佳代 菅野 知恵美 伊藤 志保 麻田 真由美 峯 佳子

藤田 往子 金光 靖 芦田 隆司* 金丸 昭久*

近畿大学医学部附属病院輸血部

*近畿大学医学部第3内科学教室

同種血輸血による免疫抑制の点から、輸血例での癌再発率が高いとの報告など、輸血が癌の予後に影響すると言われている。これらのことから悪性腫瘍患者の多い外科、産婦人科手術でも自己血輸血の導入による同種血輸血の回避を目指す必要がある。しかし、「術前に貧血を有する症例が多い」「術前の入院期間が短い」「自己血中への癌細胞混入の可能性はある」などの理由により、現在自己血輸血がほとんど実施されていない。今回、外科および産婦人科の同種血輸血の現状を調査し、自己血輸血実施への可能性について検討した。

2000年1月から6月までの期間に輸血を準備した外科、産婦人科手術112症例について術中出血量、輸血単位数を調査した結果、600 ml から1200 ml の出血量を伴う術式では、外科で平均3単位、産婦人科で平均1.2単位の輸血が行われており、全身状態が良好であれば貯血可能な単位数であると考えられる。よって、平均輸血単位数が2単位から4単位の胃全

摘術、幽門側胃切除術、結腸切除術、広汎子宮全摘術、腹式単純子宮全摘術、卵巣腫瘍摘出術などが自己血輸血の適応術式となる。また、子宮筋腫は良性疾患で待機手術が可能であり、自己血輸血の良い適応だと考えられる。

対象症例のうち解析可能な12術式80症例について、自己血貯血可能症例の検討を行った結果、外科では輸血実施症例41例中17例、産婦人科では12例中10例で自己血貯血可能と推定され、そのうちのそれぞれ10例 (24.4%)、2例 (16.7%) は同種血輸血回避可能と考えられた。自己血貯血により、外科では輸血された198単位のうち53単位、産婦人科では75単位のうち30単位の同種血が回避できると推定された。鉄剤やエリスロポエチンの投与などにより、さらに貯血可能であると思われる。

今回、外科および産婦人科における自己血輸血の適応の可能性が示唆された。今後さらに症例を集積し、より詳細な検討を行う予定である。